

《資 料》

## 来日したザクセン関係者改訂稿

松 尾 展 成

私は、1649年から1999年までに来日したザクセン関係者について、資料、「来日したザクセン関係者」を本誌30巻1号（1998年）に発表した。そして、それを、題目はそのままながら、大幅な訂正・追加を行なった上で、拙著、『日本＝ザクセン文化交流史研究』（（株）大学教育出版、2005年）の第3章とした。この第3章に対して、記述は来日ザクセン関係者の姓（カタカナ表記）の五十音順ではなく、来日年代順になされるべきである、との批判が野村正實氏から寄せられた。この批判は正しい、と考えた私は、本稿で上記第3章第2節を以下のように改訂する。すなわち、第1に、来日ザクセン関係者の配列を来日年代順（月日は無視）に変更した。第2に、同年に来日した複数の人々は、日本滞在期間の長短を考慮せず、姓のアルファベット順に配列した。第3に、短い日本不在期間（休暇、日独戦争への召集など）は不在期間に算入しなかった。第4に、拙著刊行後に入手した情報を、上記第3章に追加した。この結果として、来日ザクセン関係者は、重複を含まずに、旧著第3章第2節の59人に旧著第4章・第5章の2人を加えた61人から、69人に増加した。なお、間隔を置いて複数回来日した人については、原則としてそれぞれ別記し、2回目以降の来日の場合には、1回目の通し番号の数字に\*を付けた。

本改訂稿の作成に当たって、コンラート・ラントロック（Konrad Landrock）氏（ドレーズデン）、上村直己氏、瀬戸武彦氏、武内博氏の教示を得た。ここに記して、深謝する。

- (1) 1649-1651年 シャムベルガー、カスパル（旧著12）
  - (2) 1656-1659年 ヴァーグナー、ツァヒャリーアス（旧著59）
  - (3) 1682-1683年 マイスター、ゲオルク [ゲオルゲ]（旧著46）
  - (3\*) 1685-1686年 マイスター、ゲオルク [ゲオルゲ]（上記（3）を参照）
  - (4) 1781-1784年 オーヴァーカンフ、クリスティアン・ヘンドリック（旧著4）
  - (5) 1785-1786年 フラッケ、ヨハン・ゲオルク（旧著39）
  - (6) 1853-1854年 ハイネ、ヴィルヘルム（旧著31）
  - (6\*) 1859-1861年 ハイネ、ヴィルヘルム（上記（6）を参照）
- （原注1）への追加。 Botschafter 1974, S. 6; 架け橋 2005, p. 278, 280.

- (7) 1859-18??年 ピーシュル、C. (18??年生まれ、1875年以後没)（追加）

彼はドレーズデンに生まれ、1860年にザクセン外務省官吏からプロイセンの駐日公使となった。

ツー・オイレンブルク伯爵の東洋派遣使節団（1859－1862年）の秘書官となった。ピーシェルの収集した日本工芸品は、1875年にドレーズデンの民族学博物館に移された。ドレーズデンで没した<sup>(1)</sup>。

（注1）Konrad Landrock 氏教示。ただし、ピーシェルの1860年にプロイセンの駐日公使となったとは、考えられない。F.A. ツー・オイレンブルク伯爵と徳川幕府の間で修交通商条約が締結されたのが、1861年であり、初代の駐日プロイセン領事フォン・プラントの着任が1862年末であった。プラントは1872年に駐日ドイツ公使に昇格し、1875年に離日した。第二代公使はフォン・アイゼンデッヒャーであった。架け橋 2005, pp.210-212, 278-284. ピーシェルはオイレンブルクの東洋派遣使節団の秘書官であった。Botschafter 1974, S.6.

（8）1859－1862年 リヒトホルフェン男爵，フェルディナント・フォン（旧著56）

（原注1）への追加。Botschafter 1974, S.6; 架け橋 2005, p.278.

（9）1859－1862年 シュピース，グスタフ（旧著16）

（原注2）への追加。Botschafter 1974, S.6-7; 架け橋 2005, p.280.

（10）1865?－1870?年 フランク，ハインリヒ・フェルディナント・パウル（1829年生まれ，1875年没）  
（追加）

パウル・フランクはドレーズデンで生まれた。士官学校を経て、1849年にザクセン陸軍の砲兵少尉となり、ドレーズデン五月蜂起鎮圧に参加した。53年に米国に移住した。61年に南北戦争が勃発すると、フランクは第52ニューヨーク州義勇兵連隊の大佐となり、いくつもの戦場で戦果を挙げ、師団長、將軍となった。戦争終結後に彼は駐日米国大使館に勤務し、日本陸軍の再編成に尽力した。一時は彼は日本陸軍の最高司令官となった。その後、彼は米国に帰って、死去した<sup>(1)</sup>。

（注1）Konrad Landrock 氏教示; Bähr 2009. —この新聞記事の中で、一時は彼は日本陸軍の最高司令官となった、との記述は誤りであろう。明治日本の陸軍最高司令官は、明治4年の兵部省（明治5年に陸軍省）参謀局長から明治11年の参謀本部長を経て、明治21－45年の参謀総長であるけれども、その中に外国人は一人もいない。近代資料研究会 1971, pp.142-154.

（11）1871?－1887年 ツァッペ，カルル・エドゥアルト（18??年生まれ，1887年没）（追加）

カッセル市生まれ。1871年あるいは73年から1887年まで横浜のドイツ領事館に勤務し、1875年には駐日ドイツ公使となった。彼は、ドイツ外務省に斡旋された、ザクセンの官吏（sächsischer Leihbeamte）であって、彼に関する文書はザクセン外務省と文部省の文書の中に含まれる。それには日本の事情が具体的に記されている。ツァッペが収集した日本工芸品は、1876年にドレーズデンの民族学博物館に引き渡された。彼は日本で没した。彼の次の公使はデーホフ（Doenhoff）伯爵であった<sup>(1)</sup>。

（注1）Konrad Landrock氏教示。——マックス・フォン・プラントはF.A. ツー・オイレンブルク伯爵の東洋派遣使節団（1859－1862年）の公使随員となり、1862年からはプロイセンの初代駐日領事、1871年からはドイツ帝国の駐日弁理公使であった。1874年11月に駐中国公使に任命されたプラントは、彼の職務を1875年2月に横浜駐在領事ツァッペに委託した。プラント

の次に1874年末に任命された駐日弁理公使は、カルル・フォン・アイゼンデッヒャーであり、1882年まで在任した。その次の駐日公使（1882-1885年）はオットー・フォン・デーネホフ伯爵であった。Botschafter 1974, S. 22-23, 31, 36, 140.

(12) 1873-1877年 エクスネル, オトマル (旧著2)

彼の日本滞在期間は「1875年から77年まで（あるいは73年から76年まで）」ではなく、1873年から1877年まで、とされるべきである。したがって、没年は1877年以後である<sup>(1)</sup>。

(注1) 武内博氏教示；成田 1962, pp. 196-198.

(13) 1873-1876年 ヒルゲンドルフ, フランツ (旧著35)

(原注1) への追加。架け橋 2005, p. 212.

(14) 1873-1885年 ネットー, クルト (旧著28)

(原注3) への追加。架け橋 2005, p. 314-318.

(15) 1875-1885年 ナウマン, エトムント (旧著26)

彼は1883年と85年に四国で地質を調査した。高知県領石の青年医師「大塚氏はナウマンに愛され[,] 案内に努むる所があった」。ナウマンは「学専見聞知博経験」の漢字とそのドイツ語を和紙に墨書きして、大塚氏に与えた。高知県「佐川の案内は外山矯氏が専らこれに当たった・・・」。 「ナウマン氏は青年外山を愛し、其の依頼に応じて別掲の詩を毛筆で画箋紙の上に大書して与えた」。 「外山氏は大正十年筆者〔江原〕が訪れた際は・・・ 齢八十を過ぎて居た・・・」。 「外山氏が當時を隔つる数十年の後[,] 尚ナウマン氏に愛敬の念を寄するを見て[,] 江原は」感激したのである。帰国後ナウマンが外山に送った「白亜紀アムモナイトの標本一揃」を、江原は実見している<sup>(1)</sup>。

(注1) 江原 1960, pp. 10-12. 上記引用文の「別掲の詩」(ドイツ語)と同じものを、ナウマンは上記外山にも贈った。ただし、後者は日時、場所と署名がない。両者は現在、佐川地質館に展示されている。外山矯について、瀬戸武彦氏教示；安井 2005, pp. 2-4.

(原注1) への追加。架け橋 2005, pp. 190-197.

(16) 1876-1905年 ベルツ (1905年からフォン・ベルツ), エルヴィン (旧著42)

(17) 1876-1884年 コルシェルト, オスカル (旧著10)

(18) 1876-1881?年 マルティン, C. F. (旧著48)

(19) 1877-1881年 ショイベ, ボート (旧著20)

(20) 1878-1883年 メツガー, アードルフ (旧著50)

(21) 1878-1879年 テンツレル (旧著25)

(22) 1881-1892年 ケルナー, オスカル (旧著8)

(23) 1884-1907年 モスレ, アレクサンダー・ゲオルク (旧著52)

(24) 1886-1927年 ユンカー, エーミール (旧著55)

生地はビショッフスヴェルダ市近郊ヴァイケルスドルフ村（オーバーラウジッツ）である<sup>(1)</sup>。  
 (注1) 上村直己氏の教示による。

- (25) 1887-1892年 シュミーデル, オットー (旧著18)
- (26) 1888-1892年 シューリヒ, アルント・ヘルマン (旧著19)
- (27) 1889-1911年 レーンホルム [シュミット=レーンホルム], ルートヴィヒ・ヘルマン (旧著58)
- (28) 1895年 ズスマン, アウグスト (旧著22)
- (29) 1896-1897年 ハルティヒ, ゲオルク (旧著34)
- (30) 1896-1897年 シャンツ, モーリッツ (旧著14)
- (31) 1898-1909年 ハース, ハンス (旧著32)
- (32) 1902-1911年 シャールシュミット, クレーメンス (旧著13)
- (28\*) 1903年 ズスマン, アウグスト (上記 (28) を参照)
- (33) 1907-1909年 シュテヒャー, ゲオルク・ヴァルター (旧著15)

(原注4) への追加. 松尾 2010を参照.

- (34) 1908-1911年 バイアー, ヨハネス・アルベルト (旧著29)
- 彼の出生地はアントワープではなく, アントウェルペンと記されるべきである.

- (35) 1908-1914年 ジーモン, エトムント (旧著11)
- (28\*\*) 1908年 ズスマン, アウグスト (上記 (28) を参照)
- (36) 1909-1914年 ヴェンツィヒ, ハインリヒ (旧著1)
- (37) 1910-1931年 ヘルフリッチュ, ヘルマン (1885年生まれ, 1943年没) (追加)

ブラウエン市で生まれたヘルフリッチュ（ヘルフリッツあるいはフェルフリッチュと記される場合もある）は, 1910年に第八高等学校（名古屋）ドイツ語講師となり, 20年以上もドイツ語を教え, 1931年に故郷に帰った. 彼に八高で教わり, ベルリン大学の眼科教室に留学した瀬木本立は, 1934年にブラウエン市ヘルマン・ディートリヒ街7番地の彼の自宅を訪問した<sup>(1)</sup>.

(注1) 上村直己氏教示: 瀬木本 1936, pp.1-4; 作道・江藤 1973, p.244; ブラウエン市立文書館回答.

- (38) 1911-1914年 ミュラー, マックス (旧著49)
- (39) 1911-1914年 レックス伯爵, アルトゥル・フォン (旧著57)

(原注1) への追加. Botschafter 1974, S.75-82; 架け橋 2005, pp.36-39.

- (40) 1911-1932年 ユーバーシャール, ヨハネス [ハンス] (旧著54)
- (41) 1913-1914年 ベーレント, マルティン (旧著44)
- (42) 1913-1925年 ベルリーナー, ジークフリート (旧著43)
- (43) 1913-1949年 フランク, ルーイ (旧著40)

- (44) 1913-1920年 ゲプフェルト, アルトゥル (旧著7)
- (45) 1913-1944年 ショルツ, パウル (旧著21)
- (46) 1914-1919年 クラウスニッツァー, フランツ (旧著第5章)
- (47) 1914-1920年 エンゲル, パウル (旧著2)

1935年の「蘭領印度在住ドイツ人名簿」, 1935にも, 「オランダ帰化者名簿」にも, エンゲルは含まれていない<sup>(1)</sup>. いずれにせよ, 日本解放以後の彼の生涯, 没地・没年は不明である.

なお, 旧著, 97ページ, 13-14行目の「1915年の丸亀収容所に軍楽手・喇叭手・鼓手も現役下士官・兵士の音楽家(音楽家①とする)も記載せず,」は, 「1915年の丸亀収容所に軍楽手・喇叭手・鼓手を5人, 現役下士官・兵士の音楽家(音楽家①とする)を0人と記載し,」に改められるべきである.

(注1)「蘭領印度在住ドイツ人名簿」, 1935:「オランダ帰化者名簿」.

- (48) 1914-1919年 コップ, ヴィルヘルム

1917年に板東ドイツ兵俘虜収容所が設置されると, 鳴門の製菓業者, 富田久三郎は板東収容所の傍にドイツ式の乳牛・豚飼育畜舎, いわゆる「ドイツ牧舎」を創設した. そこに雇用され, 日本人に酪農・養豚技術を教えた酪農技術者クラウスニッツァーについては, 本稿(46)を参照されたい. 捕虜帰国後に富田久三郎は, 富田 2006によれば, 板東収容所内にあった捕虜別荘2戸を, 自分の富田製菓工場近くに移築した. その中の1戸は「コップ大尉」の別荘であった.

このドイツ大尉は, 俘虜情報局編纂『俘虜名簿』の初版にも改訂版にも, 姓が誤ってコッ「ペ」, 「本籍地」がドレースデンと記載されているけれども, 正しい姓はコッ「プ」である. 松尾 2006を参照. また, 富田実氏は鳴門の富田本家の蔵から近年発見された, 一枚の古い写真を私に示された(松尾 2008(1)を参照). 若い西洋女性の全身像であり, 裏側にドイツ語で「私の愛妻」, 「1922年聖霊降臨祭」と手書きしてある.

さて, ドイツの青島捕虜研究家ハンス=ヨアヒム・シュミット氏(ホイスヴァイラー)の「捕虜リスト」から略記すると, コップは1882年3月にザクセン[王国] オーシャッツ郡ヴェラースヴァルデ村(Wellerswalde)で生まれ, 1900年に海軍少尉候補生となり, 09年には海軍大尉に昇進した. 13年2月に膠州派遣海軍砲兵大隊第1中隊隊長となり, 妻ヘレーネと青島に住んだ. 青島陥落後はまず熊本に, 次いで, 久留米に, 最後に板東に収容された. 彼は17年4月に海軍少佐に昇進し, 板東から解放され, 20年に帰国した. 帰国後は北海海軍区参謀部付となり, 24年に海軍兵学校勤務, 26年に海軍大佐に昇任し, 間もなく退役. さらに, 36年に現役に復帰して, ハンブルク軍管区司令官, 41年に北ロシア戦線海軍守備軍(Seeverteidigung)司令官などを歴任し, 42年海軍少将, 43年にロワール海軍守備軍司令官となり, 同年6月に退役した. 第二次大戦後はハンブルクに住み, 1963年9月に同市で没した<sup>(1)</sup>.

私は新発見の上記西洋婦人像をドイツのシュミット氏に送り, いくつか質問した. 回答の中に次の部分があった. コップ大尉が収容所から夫人宛に書いた, 1917年10月16日付と18年8月17日付のハガキ(いずれも横浜のフォン・コッホ(v. Koch)夫人気付)を自分は所持している. これらのハガキ2通の筆跡は, 1922年撮影・西洋婦人像の裏に書かれている文字に酷似している. したがって, 写真

の女性はコップ夫人である。

そうだとすると、あの写真は、コップが富田久三郎に贈ったものであろう。その時期はいつか。富田久三郎のドイツ視察（1927年）の際にコップが久三郎と面談して、写真を手渡した、と考えるには、撮影年と面会年が離れすぎている。したがって、北海海軍区参謀部付となっていたコップが、撮影後間もなく鳴門に郵送したのであろう。コップと富田久三郎との関係は、コップの板東収容中に築かれたとしか考えられないが、二人は板東でどのような間柄であったのか。また、富田久三郎が板東収容所内のコップ大尉別荘を富田製薬工場近くに移築した理由は、何であったのか。それらを実証する資料は、1927年に二人が面会したかどうか、の記録を含めて、まだ発見されていない。

（注1）シュミット「捕虜リスト」。——なお、コップ夫人ヘレーネとその子供については、瀬戸 2001, p. 96；久留米収容所 2003, pp. 26-27, 164；久留米収容所 2005, pp. 126-128に言及されている。

（49）1914-1919年 レーマン, オットー（旧著第4章）

（33\*）1914-1920年 シュテヒャー, ゲオルク・ヴァルター（上記（33）を参照）

彼は1920年1月26日に収容所から解放された<sup>（1）</sup>。なお、旧著15の（注13）中の「日独戦争 1916」は、「日独戦史 1916」の誤記である。

（注1）板東収容所沿革史 1920。さらに、松尾 2010を参照。

（50）1922-1930年 ヘルテル, フリッツ [フリードリヒ]（旧著41）

（51）1924-1959年 ヤーン, エルヴィン（旧著53）

（52）1926-1947年 カルシュ, フリッツ（1893年生まれ、1971年没）（追加）

彼はドレスデン近郊ブラーゼヴィッツ村で生まれ、1926-40年に松江高等学校ドイツ語講師となり、1940-45年には東京のドイツ大使館に勤務した。1947年に帰国し、マールブルク、後にカッセルに居住した<sup>（1）</sup>。

（注1）若松 2005, pp. 158-163。

（53）1926年 ナーホト, オスカル（旧著27）

（54）1928-1944年 高 ヘディ [ヘードヴィヒ]（旧姓ヴェーケル）（旧著9）

（55）1929年 ハイゼンベルク, ヴェルナー（旧著30）

（56）1933-1945年 ビンケンシュタイン, ロルフ（旧著36）

（57）1933-1941年 ハミッチュ, ホルスト（旧著33）

（58）1936年 シュプランガー, エードゥアルト（旧著17）

（40\*）1937-1965年 ユーバーシャル, ヨハネス [ハンス]（上記（40）を参照）

（59）1938年 バルクハウゼン, ハイน์リヒ（1881年生まれ、1956年没）（追加）

彼はブレーメン市で生まれ、1911年にドレスデン工業大学弱電技術研究所の所長となり、留学生、八木秀次と伊藤庸二を指導した。1938年来日し、講演した。伊藤はバルクハウゼンの著作を『熱電子管』として翻訳した。彼はドレスデンで没した<sup>（1）</sup>。

(注1) Konrad Landrock氏教示:『人事興信録』, 18, い, p. 45 (伊藤庸二の項)。

- (60) 1938-1945年 フェルマー, ヘルムート (旧著37)
- (61) 1941-1947年 メーリンク, フリッツ (旧著51)
- (54\*) 1949年- 高 ヘディ [ヘードヴィヒ] (旧姓ヴェーケル) (上記 (54) を参照)
- (62) 1961年から1994年までしばしば ボッセ, ゲーアハルト (旧著45)
- (56\*) 1962-1985年 ビンケンシュタイン, ロルフ (上記 (56) を参照)
- (55\*) 1969年 ハイゼンベルク, ヴェルナー (上記 (55) を参照)
- (61\*) 1969-1976年 メーリンク, フリッツ (上記 (61) を参照)
- (63) 1971年から2000年までに18回 マズア, クルト (旧著47)
- (64) 1972年- フーブリヒト, マンフレート (旧著38)
- (65) 1977-1982年 ブリオル, ヴィルフリート (1945年生まれ-) (追加)

彼は北ボヘミアで生まれ、ドレーズデンで育ち、1965-70年にドレーズデン工業大学で経営工学を学んだ。1977-82年に東ドイツ繊維機械コンビナートの駐日代表として丸紅、住友などの商社と取引し、大阪や福井などに出張した<sup>(1)</sup>。

(注1) Konrad Landrock 氏教示。

- (66) 1985-1988年 ゼルトマン, ヴォルフガング (旧著23)
- (67) 1988-1993年 ゾンダーマン, ペーター (旧著24)
- (68) 1992年- ケスナー, ゲジーネ (旧著6)
- (62\*) 1994年- ボッセ, ゲーアハルト (上記 (62) を参照)
- (67\*) 1996年 ゾンダーマン, ペーター (上記 (67) を参照)
- (69) 1999-2001年 ケストナー, ウーヴェ (旧著5)

#### 追加文献目録

「オランダ帰化者名簿」=「1850年から1984年までのオランダ帰化者名簿」<http://www.shgv.nl/naturalisations.htm>

架け橋 2005=Japanisch-Deutsches Zentrum Berlin/Japanisch-Deutsche Gesellschaft [Tokyo] (Hrsg.), *Brückenbauer. Pioniere des japanisch-deutschen Kulturaustausches*.『日独交流の架け橋を築いた人々』, München.

近代資料研究会 1971=日本近代資料研究会(編),『日本陸海軍の制度・組織・人事』, 東京大学出版会.

作道・江藤 1973=作道良男・江藤武人(編),『伊吹おろしの雪消えて——第八高等学校史』, 財界評論新社.

シュミット「捕虜リスト」=<http://www.tsingtau.info/index.html?listen/datenbank.html>

『人事興信録』, 18版 (1955年).

瀬木本 1936=瀬木本立,「ヘルフリッツ先生をさがす」,『第八高等学校同窓会雑誌』, 第5号.

富田 2006=富田実,「板東俘虜収容所時代のドイツ牧舎について」,『メール会報』, 203号 (2006年4月6日).

成田 1962=成田潔英,『洋紙業を築いた人々』, 製紙記念館.

松尾 2006=松尾展成,「板東収容の海軍大尉はコッペカコップか」,『メール会報』, 226号 (2006年6月23日).

松尾 2008(1)=松尾展成,「板東「ドイツ牧舎」食肉加工技術指導者プロッホベルガー略歴」,『メール会報』, 318号 (2008年3月5日).

松尾 2008(2)=松尾展成,「板東収容士官ヴィルヘルム・コップ略伝への補足」,『メール会報』, 330号 (2008年6月9日).

松尾 2010=松尾展成,「松山・板東収容士官シュテヒャーの明治天皇拝謁を巡って」,『メール会報』, 422号 (2010年11



月14日)

『メール会報』 = 『チンタオ・ドイツ兵俘虜研究会メール会報』, <http://homepage3.nifty.com/akagaki/>

板東収容所沿革史 1920 = [板西警察分署] 警備警察官出張所 (編), 『板東俘虜収容所沿革史』 (, 1920).

安井 2005 = 安井敏夫, 「ナウマン博士を陰で支えた人物・外山矯」, 『不思議の森から, 横倉山自然の森博物館ニュース』, 13号.

「蘭 領 印 度 在 住 ド イ ツ 人 名 簿」, 1935 = “Verzeichnis der Deutschen in Niederländisch-Indien”, in : *Deutsches Jahrbuch für Niederländisch-Indien* 1935.

若松 2005 = 若松秀俊, 「フリッツ・カルシュ」, 『架け橋』 2005.

Bähr 2009 = Friedemann Bähr, *Dresdner kommandierte japanische Armee. Vor 100 Jahren wurde Heinrich Ferdinand Paul Frank geboren*, in : *Dresdner Neueste Nachrichten*, 2. März 2009, Dresden.

Botschafter 1974 = Hans Schwalbe/Heinrich Seemann (Hrsg.), *Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973*, Tokyo.

# 人 名 索 引

Baelz, Erwin (von) (16)

Barkhausen, Heinrich (58)

Behrend, Martin (41)

Berliner, Siegfried (42)

Beyer, Johannes Albert (34)

Binkenstein, Rolf (55) (55\*)

Bosse, Gerhard (61) (61\*)

Briol, Wilfried (64)

Claußnitzer, Franz (46)

Engel, Paul (47)

Exnell, Ottomar (12)

Fellmer, Helmut (59)

Fracke, Johan [Johann?] Georg (5)

Frank, Louis (43)

Frank, Heinrich Ferdinand Paul (10)

Göpfert, Arthur (44)

Gößner, Gesine (67)

Haas, Hans (31)

Hammitzsch, Horst (56)

Härtel, Fritz (Friedrich) (49)

Hartig, Georg (29)

Heine, Wilhelm (6) (6\*)

Heisenberg, Werner (54) (54\*)

Hellfritsch, Hermann (37)

Hilgendorf, Franz (13)

Hubricht, Manfred (63)

Jahn, Erwin (50)

Junker, Emil (24)

Karsch, Fritz (51)

Kästner, Uwe (68)

Kellner, Oskar (22)

Korschelt, Oscar (17)

Kou [Ko], Hedy (Hedwig), geb. Wekel (53) (53\*)

Lehmann, Otto (48)

Lönholm (Schmidt-Lönholm), Ludwig Hermann (27)

Martin, C. F. (18)

Masur, Kurt (62)

Meister, Georg (George) (3)

Mezger, Adolf (20)

Möhring, Fritz (60) (60\*)

Mosle (Moslé), Alexander Georg (23)

Müller, Max (38)

Nachod, Oskar (52)

Naumann, Edmund (15)

Netto (Netto-Nothwang), Curt (14)

Overkamp [Overkamp?], Christian Hendrik [Heinrich?] (4)

Pieschel, C. (7)

von Rex, Arthur Graf (39)

von Richthofen, Ferdinand Freiherr (8)

Schamberger, Capsar (1)

Schanz, Moritz (30)

Scharschmidt, Clemens (32)

Scheube, Botho (19)

Schmiedel, Otto (25)

Scholz, Paul (45)

Schurig, Arndt Hermann (26)

Seltmann, Wolfgang (65)

Simon, Edmund (35)

Sondermann, Peter (66) (66\*)

Spieß, Gustav (9)

Spranger, Eduard (57)

Stecher, Georg Walter (33) (33\*)

Sußmann, August (28) (28\*) (28\*\*)

Tentzler [Tenzler?], [Vorname unbekannt] (21)

Überschaar, Johannes (Hans) (40) (40\*)

Wagner, Zacharias (2)

Wäntig, Heinrich (36)

Wekel, Hedy (Hedwig) = Kou [Ko], Hedy (Hedwig), geb. Wekel (53) (53\*)

Zappe, Karl Eduard (11)